

# 半世紀先を見すえた 大学改革

—開学50年の節目に取り組むキャンパス再編—

新たな教育のあり方や少子化といった時代の変化、さらには施設の老朽化に対応して、キャンパス再編に取り組む大学が相次いでいる。そうした取り組みの先には再編後の未来の姿が見える。

工学系の愛知工業大学と文系の獨協大学は、それぞれ2009年と2014年に、開学から半世紀を迎える私立大学である。50周年の節目に当たり、次の半世紀を見すえた独自の改革にアクティブに取り組んでいる。その取り組みに共通するキーワードが「教学の充実・発展」と「地域や環境への新たな働きかけ」。これらのキーワードは、新設された愛知工業大学・新1号館と獨協大学・東棟の建築や教育環境づくりに生かされている。各大学のキャンパス再編と新施設について、ビジョンを踏まえながら紹介していく。

愛知県

## 愛知工業大学 八草キャンパス 新1号館

p02-06

埼玉県

## 獨協大学 東棟

p07-12

1階ラウンジ・大階段 / テーブル: DT-15、イス: アイバッグ  
イベントスペースにもなる。

## INTERVIEW

(株)青島設計  
設計室 チームリーダー  
内藤 正隆 氏



## 創造的な工学教育は、 学生が参加したくなる環境から

愛知工業大学は、開学から50周年を迎えた2009年に、「新たな時代の実学教育」を目指して、学部・学科・専攻を再編し、工学部、経営学部、情報科学部の3学部、7学科、14専攻の工学系総合大学となった。「創造と人間性」をモットーに「ものづくり」を通じた工学教育を行ってきたが、その50年のノウハウを文系教育に活かして、独自の経営学部と情報科学部を創出している。

八草、自由ヶ丘、本山の3キャンパスのうち、主体となる八草キャンパスは、木々に囲まれた約66万㎡の広大な敷地にあり、本部棟、各学科棟や図書館など多くの施設を備えている。新たに誕生した新1号館は、学習環境を充実させ、学生のために快適で交流が芽生える場を創出する目的で建設された。

### 新1号館が建設された背景は 次世代キャンパスを目指す教育環境づくり

愛知工業大学八草キャンパスは丘陵地に在り、アプローチを上っていくと、東西に走るキャンパスアベニューにたどり着きます。新1号館は、そのアベニューに面して建設されました。

大学からの要望は、まず、新1号館をキャンパスのランドマークとして建設し、そこに高度なマルチメディア教育が可能な設備と施設を整備し、さらに、旧1号館に替わる講義室を用意することでした。次に、学生がゆったりと座って食事や休憩そして交流できるスペースを、可能な限り多くつくることでした。キャンパス内に学生食堂やフードコートはありますが、数が十分ではありませんでした。

当初は、地中埋設物のために、建設予定地はもっと狭くてアベニューには接していませんでした。しかし、要望に応じて魅力的な施設にするために、私共は新1号館のファサードがアベニューに面するような計画を提案したのです。大学にこの提案を受け入れていただき、埋設物を移して広い敷地を確保できたことで、より魅力的なスペースづくりが可能になったと考えています。これをきっかけに、就職支援施設であるキャリアセンター、図書館機能を持つメディアセンター、学生が自由に利用できるレンタルスペースなども設置されることになりました。



表紙、p02外観 撮影：(株)センターフォト

## デジタルイメージで統一された意匠は 周りの環境との調和を重視

こうして建設された新1号館は、最先端の教育機能を持つ高層棟と、学生がくつろげる交流・支援機能を持つ低層棟が、使いやすくシンプルに構成されています。建物への誘導面では、高層棟はキャンパスへのアプローチから、低層棟はアベニューからの視線を意識した断面構成にしました。

外観については、高層棟には情報科学部が主に使用する学習機能があることから、デジタルなイメージを表現するため、ファサードのカーテンウォールにシェルフをランダムに取り付けました。日射光によるシェルフの影が刻一刻と変わっていきませんが、これは「情報は変化する」ということから発想しています。建物の高さは、後方の既存建築とほぼ合わせてあります。一方、低層棟はアベニューに面しているので、圧迫感が無いように透明感を持たせ、周りの木々の高さと同調するように配慮しました。さらに、エントランス上に張り出した大庇の支柱は、これらの樹林をイメージした意匠としています。

インテリアについては、高層棟は学習空間なので基本的にプレーンで均質ですが、学生が食事や休憩をする交流空間には、質感や素材感のある仕上材を使いライティングや採光にも気を配って、雰囲気をプラスしています。またデザインのモチーフとして、天井の照明、床のタイル、扉のスリットの形やドアハンドルまで、デジタルなイメージで統一しました。

新1号館の工事中に、建築学科の学生たちに実学講義をする機会があり、講義後に現場を見せて説明をしました。設計が現場にどう実現されたかを、体験として分かってもらえたのではないのでしょうか。

環境への配慮として、太陽光発電は基礎工事済みで、時期が来たらいつでも利用できるようにしてあります。ファサードのシェルフは、ガラス面の日射光負荷を45%ほど低減しています。空調については、低層棟を居住域空調にして省エネに配慮しています。またサステナビリティへの配慮として、将来の学部再編や学生数増による改修などにも対応できるように、東西33m、南北15.5mの大スパンの無柱空間を確保しました。

## 半屋外で透明な空間を駆使して 学生が参加したくなる環境づくりを

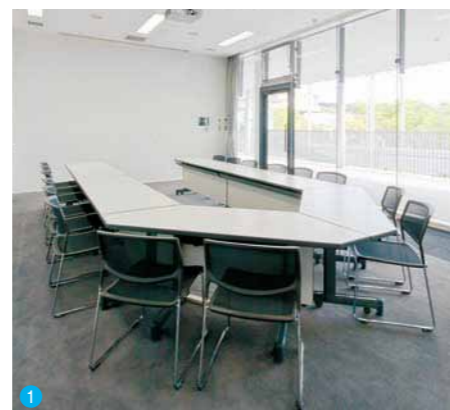
八草キャンパスを見た時に、中と外の間の空間である半屋外が少ないと感じたので、新1号館にはこうした空間をできるだけ多くつくりたいと思いました。アベニューからつながる低層部の1階に、半屋外のピロティエを設けました。ここは、全国の大学の土木系学科による橋梁模型を使ったコンテストをするなど、イベントにも利用され始めています。

中と外の隔たりをなくして透明感を上げれば、アベニューから見た時に、中で何をやっているかが分かります。そうすると、学生は行われていることに参加してみようという気になります。こうしたことが徐々に連鎖していき、キャンパスが活性化されることをねらっています。また、授業が終わったら気軽に寄り道ができる、街なかにあるようなスペースがキャンパス内にあるといいですね。

## 学生のライフシーンに合わせて 様々なラウンジを用意

大学の要望のひとつである、学生のラウンジスペースの確保については、学生からもアンケートを取って、必要数が計400席と決められました。郊外に位置する八草キャンパスは、都心からのアクセス条件があり、大学もその点は感じておられると思います。そういった環境だからこそ、街なかの商業施設のような雰囲気がある場所をつくりたいと考えました。広いスペースに、ただ400席を収めるわけにはいかないので、「今日は静かに過ごしたいからここ」「明日は…」などシーンを想定して5つのラウンジを、低層棟の1~2階に用意しました。

1階にある2つのラウンジの床は屋外仕様のタイルにして、外部空間からつながる明るく活動的な多少ザワザワとしてもよい場とし、2階へつながる大階段からは木を使用して、静かでしっとりとしたインテリアへと場面展開を図っています。1階には3つのラウンジがあり、そのひとつはカフェです。大階段の前のラウンジは、くつろぐことはもちろん、イベントや講義もできるスペースとしました。壁面のサービスウォールの中にはスクリーンが仕込まれ、映像を観ることができますし、パフォーマンスをする場合には大階段は観客席になります。階段は、単に上下階をつなぐだけでなく、こうしたスペース利用のアイデアを広げることもできます。2階には2つのラウンジがあり、そのひとつには、大学では珍しい毛足の長いカーペットを敷いてホテルのラウンジ風のしつらえにしました。



- ① プレゼンテーションルーム/PC対応テーブル:CTN3、イス:デイトライト
- ② ③ メディアセンター/PCテーブル(特注品)、壁面AVテーブル(特注品)、ソファ、TV台(特注品)、カウンター(特注品)、ハイチェア
- ④ ラウンジ(2階)/角テーブル:DT-P3、丸テーブル:DT-P5、イス:アイバッグ
- ⑤ カフェラウンジ/ラウンジ・カフェテリア家具一式
- ⑥ ラウンジ(2階)/スツール・プランターボックス・ローテーブル:ステップ、イス:アイバッグ
- ⑦ ラウンジ(1階)/テーブル:DT-P5、イス:ベン、カウンター:アイ
- ⑧ キャリアセンター前/テーブル:DT-15、イス:アイバッグ
- ⑨ 講義室/PC対応講義デスク・イス:SCF-PC-1507

## メディアラボとメディア視聴覚室は 機能・意匠ともに話題の施設

高層棟の中で、大学が重視した施設が2つあって、それらはメディアラボとメディア視聴覚室です。

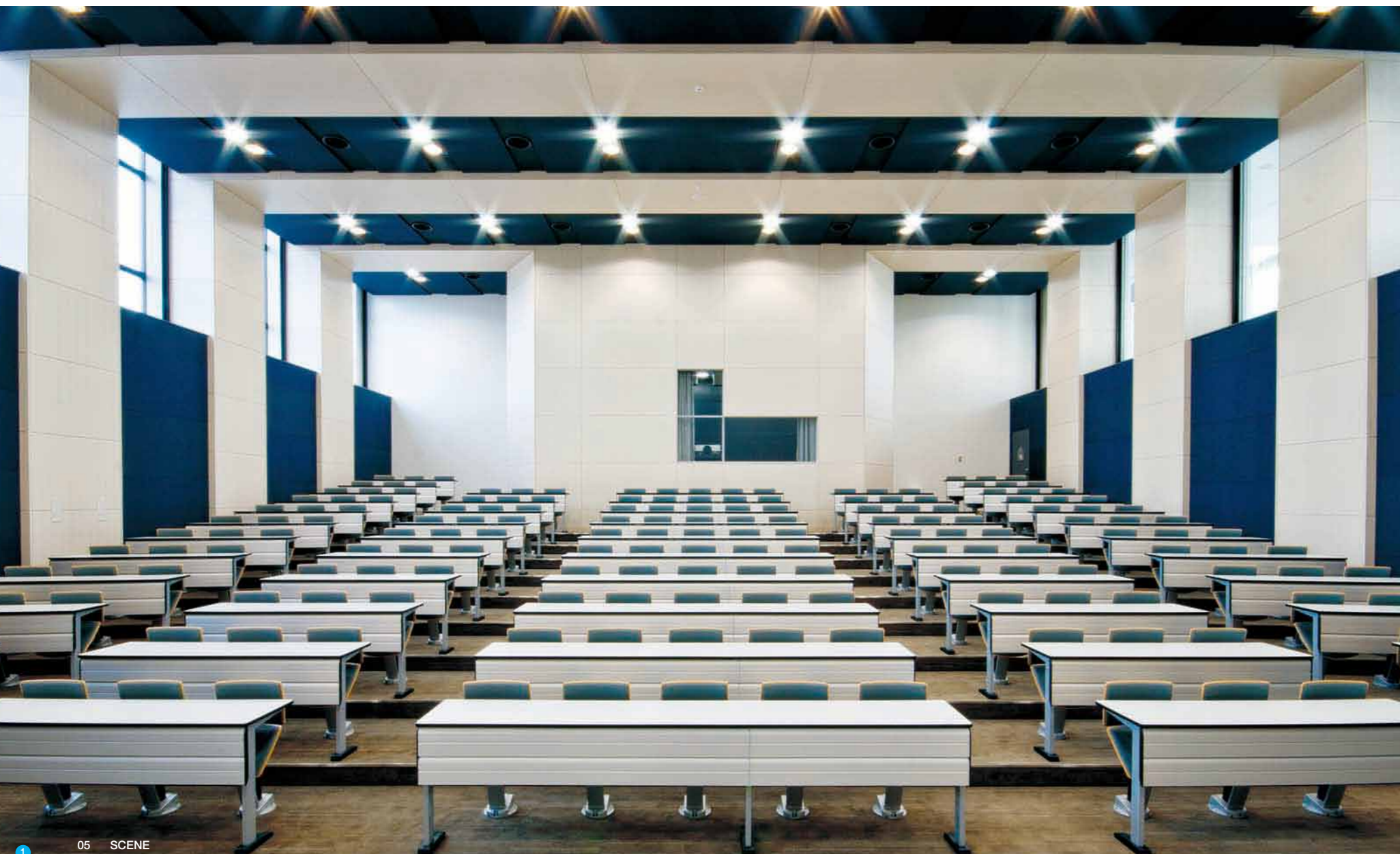
7階にあるマルチメディア工房は情報科学部の中核で、メディアラボとスタジオからなっています。メディアラボには、大学の実習機器としては最高水準のパソコンとスクリーンが設置され、パソコンデスクが化学式状に並び、自由に創造的な実習スペースをつくり出しています。天井をなるべく高く見せるために、有孔折板を一部に吊ったスケルトン天井にして、天井の圧迫感を減らしました。インテリアは、基調の黒に家具の白を配して、シンプルでスタイリッシュな雰囲気にしています。スタジオでは、人の動きを映像処理できるモーションキャプチャーやレンダーマンなど、最先端のソフトやツールが利用できます。

吹抜けになった3~4階のメディア視聴覚室は400インチの大画面プロジェクターを備え、大学の講義のみならず、学会や講座など外部の利用も想定されます。既に2010年のCOP10でのイベントにも利用されました。ですからグレード感を重視するために、壁はホワイトオークを

使い、モダンでシックなインテリアとしました。音響と空調にも配慮し、黒い吸音板を組み合わせることで良質な音が得られるようにしました。空調は床下チャンバーを使って、快適な空気の流れをつくり出しています。

## “街が大学”をキーワードに これからのキャンパスを提案

現在の八草キャンパスは、キャンパスアベニューに沿って様々な施設が建ち並び、大きなゾーニングがなされています。これからの教学の再編や施設への新しいニーズに合わせ、このゾーニングをベースとして徐々に変わっていくでしょう。老朽化施設を取り壊したところに広場ができて、新しい憩いの場になってよいと思います。中学や高校に比べると、大学は目の前に実社会が待ち受けています。大学らしいイメージからつくった施設だけでなく、今までとは違う要素、例えばオフィスや商空間に近い環境がキャンパス内にあってもよいのではないかと思います。例えば“街が大学になっている”…そういった発想で、これからのキャンパスづくりについて、建築の立場から様々な提案をしていきたいと考えています。



① メディア視聴覚室 / 講義デスク・イス: SCF-5505, 移動席 (テーブル: CTN2, イス: SCM-5505C)  
② メディアラボ / PCデスク (特注品)、イス: AEX